

新刊 紹介

"... the difference between a college man and a man lacking in college is that he has the resource of books, that he knows there's a book side to everything."

憲法研究所編 特集1「最高裁判所にかんする研究」

京都・法律文化社、A5判二〇八頁、定価六四〇円。

憲法研究所が、発足以来、憲法及び関係諸問題の研究を進め、その成果として、世にとうのが本書である。

本書は司法制度の基軸をなす最高裁判所の法的側面を総合的に研究しようというのがその狙いである。

本書は三部より構成されている。第一部には、憲法七六条第三項による裁判官独立の義務規定に基礎された司法権独立の法体

制を説く「最高裁判所と司法権の独立 田畑忍」、憲法八一条について、違憲審査権と違憲合憲決定権を峻別しながら、最高裁判所の違憲合憲決定権の性質を明らかにした「最高裁判所の違憲合憲決定権 一円一億」、高度の政治性を有する国家行為には司法審査権が及ばないとする、いわゆる統治行為説に対して、憲法八一条、九八条の客観的解釈より痛烈に批判する「統治行為説批判 磯崎辰五郎」が含まれている。これらの論文には、いわゆる京都学派の面目躍如たるものがあるといわなければならない。

第一部には、その他「最高裁判所裁判官国民審査制度 室井力」「最高裁判所の憲法保障機能 黒田了二」「最高裁判所の規則制定権と司法行政 大西芳雄」「帝国憲法と行政裁判所 芳野勝」「日本国憲法と行政裁判 西尾昭」「既判力 山中俊夫」「訴訟の実態 毛利与一」の七つの好論文が掲載されている。

第二部は、各国最高裁判所の研究にあてられ、イギリスは大野真義、アメリカは横川博、ドイツは覚道豊治、イタリアは阿南

成一、フランスは野村敬造、ソビエトは中山研一、中華人民共和国は浅井敦という各権威者によって簡にして要を得た解説がなされている。

第三部には、学談「日本国憲法第三十九条の研究」が収録されている。特にその前段後句の解釈に関し、一度無罪判決があった場合、検事上訴は認められないとする田畑説に対して、中村宗雄教授は、訴訟法的観点から、歴史的、沿革的に反駁される。この両者のやりとりは、けだしこの学談会の圧巻であろう。

以上、紙数の関係上、個々の批評を割愛せざるを得ないが、この特集全体を通じていい得ることは、客観的に憲法の法理を把握しようとする努力が窺われるとともに、各論文が反権力主義と反官僚主義の強いバックボーンによって貫かれていることである。

研究所は続いて、特集Ⅱ「平和思想史」特集Ⅲ「戦争と各国憲法」の出版を予定している。あわせて、法学徒の御一読をお勧めする次第である。(M)

木村孫八郎著（校友）「考える輩」東京、毎日新聞社、B 6判一九二頁、定価三〇〇円

著者は大正十二年法学部卒。経済誌「エコノミスト」編集長をへて現在、大和証券常務取締役をしている。本書には歴史・思想・世相・記者時代の思い出などをつづる三十九編の随筆が集められているが、その豊富な人生体験と中庸をえた見識が生かされた好著である。以下はその一部。

『人はなぜ死を恐れるか。これは古くから新しい問題である。ガンの患者には、病名をかく秘しておく。それを聞かされることは死刑の宣告にひとしいからである。一世の英雄、豊臣秀吉も死の床にあつて悶々、死にまざる苦しみを経験している。元気なときの彼は他人の命を断つたのをノミや力をたたきつぶすくらいに考えていた。

秀吉の場合は「天下」というものを私有財産と心得ていたのである。それを秀頼にそっくりわたしたいと思つた。そこに無理がある。豪気な秀吉も死の床についてからはまったく人が変わった。ぐちつばい老人となつてしまふ。五大老、五奉行に頭をさげ

て「たのみます、たのみます」をくりかえしつつ、断末魔におちいつていく。それでもけつきよく家康に「天下」をとられていふ。要するに私有すべからざるものを私有しようとしたところに秀吉の「死の苦しみ」が生じたのだ。

大それた望みをもつものほど死ぬときは苦しい。しかし財産を持たない人でも死ぬときはいやなものである。これは生物の本能かもしれない。未知は、恐怖である。

死後はどうなる。この真剣な質問をうけて孔子は「いまだ生を識（し）らず、いずくんぞ死を識らんや」と言つた。理窟はその通りであるが、これでは、解答になるまい。

わたしは長男を失つたあと十年ほど、心靈学に凝（こ）つたことがある。いまでも心靈学の本が二百冊くらい書架にチリ、ホコリを浴びて残っている。

わかつたようでわからないのが死と生の問題である。しかし業（ごう）といおうと原罪といおうと、これが、被造物たる人間々の宿命であるかも知れない。――死の恐怖々より。

大木久雄著（大学々生部職員）「ロマンの足跡」

京都市火曜会 B 6判五〇頁、定価二〇〇円
必ずしも派手とはいえない京都の青年

詩人グループではあるが、地道な詩作活動は続けられている。「火曜」グループは、今年度、同人詩誌以外に、河野仁昭が「猫背の嗤い」を出版、十月に大木久雄が本書を出版した。「ロマンの足跡」は、彼の一九五六年から六三年の夏までの作品の中から十三篇を選んで編集したもので、後記に「クロマンクその表す思想は、甘さ、弱さ、脆さ、しかし純粋から生まれる強さがあつてもよい筈だ。アンチ・ロマンの風潮に抵抗するクロマンクの強さが生まれることを願つて敢て標題とした」といつているように本書に流れる彼に詩想は、荒けずりとも思える言葉の中も彼のロマンチズムをたたえている。アンチ・ロマンという言葉の把握を彼の後記から汲みとつて、ある人は「作者を知る者が読むと、何れも作者の素裸の自画像で限らない親しさを覚えながら行を追うことができる」と感想をのべているが、まことにいい得た言葉といえる。